下里・青山板碑製作遺跡 見学会報告

（令和 7 年春の見学会　令和 7 年 5 月 29 日実施）

令和 7 年 5 月 29 日、埼玉県小川町にある「下里・青山板碑製作遺跡」およびその周辺を巡る「春の見学会」を、小川町教育委員会のご協力のもと実施しました。当日は好天に恵まれ、すみだ郷土文化資料館学芸員、職員を含む 16 名が参加し、有意義な春の一日となりました。

板碑とは、中世において死者の供養や仏教の信仰を目的に造立された石塔婆の一種で、板状に加工された石に梵字（種子）や経文、供養者名、造立年月日などが刻まれています。

現在、墨田区内では 28 基の板碑が確認されており、一部はすみだ郷土文化資料館に展示されています。今回の見学会は、それらの板碑のふるさととも言える製作地を実際に訪ね、その成り立ちや背景に理解を深める貴重な機会となりました。

午前 10 時半、小川町駅に集合し、最初に訪れたのは大聖寺です。観音堂には如意輪観音菩薩が祀られているそうです。法華院で国の重要文化財である石造法華経供養塔（通称：六角塔婆）を見学しました。また、高台にある墓所では、いくつかの板碑を間近に見ることができました。これらの板碑は、まさに中世の仏教信仰の広がりと地域の歴史を今に伝える存在です。

昼食は、旧下里分校でいただきました。この分校は昭和の趣を残す木造校舎で、多くのテレビドラマのロケ地にも使用されていて、どこか懐かしい雰囲気に包まれていました。

小川町の風景	旧下里分校

午後は、まず下里地区にある馬頭尊を見学しました。この馬頭尊は、板碑と同様に緑泥片岩でできていて、自然石を活かした素朴な姿が印象的でした。

続いて訪れた槻川では、川の河床に露出した青石（緑泥片岩）を観察しました。この石は、板碑の素材として古くから使用されており、山からの切り出しに限らず、川の流れの中で採取された石も板碑に加工されたことが分かります。

川を渡り、割谷地区から山道を進むと、目的地である「下里・青山板碑製作遺跡」に到着しました。小川町教育委員会が管理するこの遺跡群は、板碑の素材である緑泥石片岩の採掘から、板碑特有の形状への加工工程が明らかとなった全国的にも貴重な遺跡です。特に関東地方で広く見られる「武蔵型板碑」の生産拠点とされ、中世、特に 13 世紀以降の仏教信仰の高まりとともに、関東地域では 5 万基以上の板碑が造立されたと推定されています。なかには、遠く離れた東京都墨田区にまで運ばれたものもあると考えられており、広域的なつながりも感じさせます。

板碑の形状についても、小川町教育委員会生涯学習課の高橋学芸員から遺跡より出土した板碑未製品を数点提示され板碑の特徴、こちらの製作所跡では形状までの加工であることなど詳しいご説明をいただきました。頭部は三角形にカットされており、その下には「二条線」と呼ばれる二本の横線が彫られ、塔の象徴としての意味が込められています。さらに下部は土中に埋めるために先細りになっているのが特徴です。ここまでの未製品を造立地付近まで運び、種子（しゅじ／梵字で主尊を示す）や造立者名、供養の年月日などが刻まれ完成品とするようです、こうした独特の様式は、信仰の在り方とともに、地域の石材加工技術の高さも物語っています。

最後に、瑞光寺跡の板碑群を見学し、当日の行程を終了しました。

今回の見学会は、すみだ郷土文化資料館学芸員ならびに小川町教育委員会生涯学習課の皆様のご尽力により実現しました。現地での丁寧なご説明、さらには実際に発掘された資料の提示を通して、まるで博物館の展示室を歩いているかのような臨場感あふれる体験ができました。

この場を借りて、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。〈小笠原 記〉

下里・青山板碑製作遺跡	当日参加者